「虫と仲良くなるための努力」

柴田　瑛瑠子

わたしの住んでいる所では、「ヤゴ救出大作戦」や「公園の生き物や植物の観察」「川調べ」など色々な授業を小学校六年間で行っています。虫が嫌いだったりする友達も居るけれど、一緒に参加しています。

私も虫が好きではありませんでした。でもお母さんがアゲハの幼虫をなでてあげながら「ツノへくさいにおいを出すものしを出さなくて、えらいね」とか、すぐツノを出す幼虫には「おこりんぼだね」などの会話をしているのを見て「ちょっぴりさわってみようかな」と思いました。アゲハの幼虫なら大丈夫かもと思いました。

卵からかえったばかりの幼虫は、ほんとに小さくてミニミニなのでかわいいけど、さわると死んじゃうかもと思ってやめました。一センチ以上のものだと安心な気がしました。

「そーっと、そーっと」と言いながら指先

20×20

を幼虫に近づけていった。幼虫は、けはいを感じたのか体を反らして「ユーッ」とツノを出した。冷たい感触があって、オレンジ色のツノが私の指先にくっついた。私は、「ギャーくさいのがくっついた!!」と叫んでしまった。「ムリだ!ムリ!」と心の中で言った。いや叫んだ。

虫が触われなくったって、生きていけるんだから。好きな人だけが虫を触わっていればいいじゃない!と思った。

でも、やっぱり気にはなる。うーんどうしよう。とてもなやむ。「そうだ!まずは観察をしてみよう」と思い、ミカンの木を探しました。「あった、あった」とさっそく観察。ミカンの木には、新しい枝が出ていました。それは、とても柔かくていい香りがしました。少しアゲハの幼虫がツノから出す"におい"に似ていました。「やっぱり食べてるものがこの"におい"を作っているのかな」「ふしぎだな」と思いました。

20×20

ミカンの木の先の方の枝は柔かくて、下の方はかたくて下げがある。柔かい枝の小さな葉には、ところどころに卵が産み付けてありました。そこにアゲハのお母さんの"愛情"を感じました。小さな小さな生まれたての幼虫には、柔かい葉でないとと思っているのだなと思いました。生まれたての幼虫は、本当に本当にミニミニで小さいのです。小さくても眼も足も口もあり、かわいく感じました。一日一日、小さくてミニミニだった幼虫は少しずつ大きくなって黒から茶色っぽい白の混ざった色から緑色に変わっていきました。そしてサナギになりました。

「パタパタパタ・・・」眠っていた私の耳に、そんな音が聞こえてきました。何の音だろうと思いながらも、未だ眠くて起きません でした。でもふと、「あ！もしかしてアゲハがサナギから出て、出たがっているのかも」と思い、飛び起きました。昆虫ケースを見ると、やっぱりアゲハが中で羽をパタパタして

20×20

いました。「大変大変、今出してあげるね」と言いながら着替えて、ケースを持って外に出ました。気持ちの良い晴れた朝でした。放なすのはかわいそうなしいけれど「元気でね」と言いながら、ケースのフタを開けてあげました。元気に飛んでいってくれて、うれしかったです。外でアゲハを見かけると、私が育てたアゲハかな？と思ってしまいます。

あんなに嫌いだった虫が、アゲハの幼虫を育てた事で嫌いではなくなってきました。

「アゲハさん、ありがとう」と心の中で思いました。

20×20